智雲撰『妙經文句私志記』の四種釋について

―湛然撰『法華文句記』との對比を中心に―

廣田誠嗣

一　はじめに

智雲（生沒年不詳）は、中國天台の第六祖湛然（七一一～七八二）の弟子である。湛然は、智顗（五三八～五九七）沒後に台頭した法相・華嚴・禪の三宗に對抗する必要もあって、智顗の『摩訶止觀』、『法華玄義』、『法華文句』を中心に註釋を施し、停滯氣味であった天台宗を復興させた。[1] 從って、後代の學僧が常に重視したのは湛然であり、その門下は付隨的な役割に留まっている。從來の研究では當然の歸結として、湛然に注目が集まり、その門下を扱うものは數えるほどしかない。[2] しかし、唐代天台教學の全體像を把握するためには、湛然門下を含めた總合的な檢討が必要である。そこで、智雲撰『妙經文句私志記』一四卷を議論の中心に据え、その教學上の特色について論述していく。

ここで、『妙經文句私志記』の基本的事項を確認するならば、本書は湛然の『法華文句記』を參照しながら、智顗の『法華文句』に對して註釋を施した著作であり、『法華經』譬喩品第三の途中までが現存している。この點について、圓珍（八一四～八九一）の『授決集』卷下に、「石鼓寺・智雲阿闍梨、是妙樂和上之小師也。……其所レ制文、多名二私志一。法華私志十四卷、至二譬喩品、國邑聚落段一、故以停レ筆。[3]」とあり、圓珍の入唐當時（八五三～八五八）から現行本と同樣であったことが確認できる。また、湛然門下には『法華文句』に關連する註釋書として、道暹の『法華文句輔正記』一〇卷、智度の『天台

法華疏義讃』六巻が現存し、智雲はそれらを參照している。[4]

先行研究における智雲への評價としては、中里貞隆氏の「六祖門下と傳えられる中で、前の智度以上の無遠慮を發揮しているのは智雲である。」や、「かく智雲は遠慮なく六祖の說を批評して憚らないが、一面には六祖を師と呼び（中略）一概に師弟說を否定し得ざるを見る。」というのが一般的であろう。註釋の形式から言えば、このような齒切れの悪い評價とならざるを得ないのである。本稿では、特に教學の內容に着目することで、湛然との關係を明らかにしたい。

さて以下では、『妙經文句私志記』の教學について論じるのであるが、本書は『法華文句』への逐語的な註釋という性格上、綱要書とは異なり、體系的に教學が論じられていない。そこで、一般的に『法華文句』の特色とされる、四種釋[5]に關する記述を分析し、考察を加えることにする。實は、湛然の四種釋そのものが十分に解明されたとは言い難いのであり、智雲を媒介にすることは、湛然の研究にも資するところがあると考える。

二　教觀二門について

四種釋とは、①因緣②約教③本迹④觀心という觀點から、『法華經』を解釋する註釋の方法である。智雲が『妙經文句私志記』巻二で、「如レ此四法、前三是事解、後一約二理觀一。前三說二他事一、後一明二己事一。……前三對二法師一、後一對二禪師一。前三異二禪師一、後一異二法師一。略明レ爲二此十種所以一。故須下約二此四法一解釋上。」と述べるように、四種釋は教觀二門で構成される。[6]言うまでもなく、教觀二門は天台教學の基本說であり、例えば、『摩訶止觀』巻七下で、「今有二十意一融二通佛法一。」[7]として列記される中の第一〇番目に、「十、一一句偈如聞而修、入レ心成レ觀。觀與レ經合、觀則有レ印。印レ心作レ觀、非レ數二他寶一。」[8]とある。この箇所に對して、湛然は『止觀輔行傳弘決』巻七之四で、「第十意者、附レ文成レ觀、文不二虛設一。觀與レ文合、名爲二印心一。如下釋二法華一一一句經皆爲中四解上。一者因緣。二者約教。三者本迹。四者觀心。」[9]と註釋している。この點については、『法華文句記』巻一上にも、「無二第四意一、將三何以辯二能詮教功一。將三何以爲二久成行本一。故一一句入レ心成レ觀。故云、觀與レ經合非レ數二他寶一。」[10]とある。

ここで留意すべきは、このように天台の獨自性として、教觀二門が强調される場合、しばしば他宗批判が含意されるという點である。[11]その顯著な例が、先に引用した『摩訶止觀』巻七下の續く箇所と、それに對する湛然の解釋に見出される。

まず、『摩訶止観』巻七下は、「唯翻譯・名數、未レ暇二廣尋一。九意不下與二世間文字法師一共上。亦不下與二事相禪師一共上。一種禪師唯有二觀心一意一。或淺、或僞。餘九全無。」[12]として、十意の中の第九番目の「翻譯・名數」を除く九意は、「文字法師」や「事相禪師」と異なり、また「一種禪師」は觀心のみで九意はないとする。この文について、湛然は『止觀輔行傳弘決』巻七之四で次のようにいう。

文字法師者、內無二觀解一、唯構二法相一。事相禪師者、不レ閑二境・智一、鼻隔止レ心。乃至、根本有漏定等。一師唯有觀心一意等者、此且與而爲レ論。奪則觀解俱闕。世間禪人、偏尙二理觀一。既不レ諳レ教、以レ觀銷レ經、數二八邪・八風一爲二丈六佛一、合二五陰・三毒一名爲二八邪一。用二六入一爲二六通一、以二四大一爲二四諦一。如レ此解レ經、僞中之僞。何淺可レ論。縱以二心王一解レ王、五陰釋レ舍、念二一體一爲二持鉢一、離二二見一爲二洗足一、將レ解二般若持鉢之名一、終不可也。用釋二法華王舍之稱一、殊無レ所レ擬。既無二分別一。淺僞何疑。是故、今家觀心銷レ經、隨二經部別一、義勢不レ等。以レ理爲レ本、詮レ行各殊。[13]

智雲撰『妙經文句私志記』の四種釋について（廣田）

「文字法師」、「事相禪師」、「一種禪師」については、不明確な部分もあるが、論旨を理解する上で、特に支障はないであろう。ここでは、以下の二點について問題とする。第一には、「世間禪人、偏尙二理觀一。既不レ諳レ教、以レ觀銷レ經…」として、禪師の經典解釋を批判する點である。第二には、「是故、今家觀心銷レ經、隨二經部別一、義勢不レ等。」として、教判論に言及する點である。

第一の論點について、湛然の批判對象を特定することは困難であるが、觀心に引きつけて經典を解釋する姿勢は、神秀（？～七〇六）や普寂（六五一～七三九）に代表される、北宗禪の『大乘無生方便門』において、類似した事例が指摘されている。[14]また、次に示す北宗禪の『觀心論』は、あらゆる修行を觀心に收斂する教說として有名である。

問。若復有レ人志二求佛道一、當下修二何法一最爲中省要。上
答曰、唯觀心一法、惣攝二諸行一名爲二最要一。
又問。云何云三一法能攝二諸行一。
答曰、心者萬法之根本也。一切諸法唯心所レ生。若能了レ心、則萬行俱備。……了レ心修レ道、則省レ力而易レ成。不レ了レ心者、所レ修乃費レ功而無レ益。故知、一切善惡皆

由二自心一。若心外別求、終無二是法一。[15]

恐らく、當時の禪宗[16]は、このような「觀心」を偏重する立場から經典を解釋したのであり、湛然はその風潮を批判したのであろう。この點について、智雲の『妙經文句私志記』巻二には次のようにある。

或曰、萬法唯心。直覽二經之大意一、明三心具二足諸法一。以二一妙觀一觀レ之、此則修行自足、簡而且易。何必須レ作二如レ是別別歷レ事。豈不レ繁。難レ之甚。

釋曰、此乃常情謬妄。自生二此惑一、未レ曉二他意一。世人多爾。今爲明レ之、以杜二迷謬一。何者、言二觀心一者、謂、約二觀心一解二釋經一也。總明二四義一釋レ經。前三約二外事一解、此一約二內心一釋。謂、自心中分別顯示、卽有二前事道理一。通二會經文之義一、令下初心行人於二自心中一常作中如レ是觀察上、修習進趣、證二得其道一。如二前所以中明一。以レ此名爲二觀心釋經一。非レ謂下直約二自己心中一以論中觀行上。殊不レ曉二他名旨一、何得三輒作二此難一。[17]

萬法は唯心であり、心に諸法を具足するので、煩わしく因緣・約敎・本迹を次第しなくてもよいのではないかという意見に對して、「初心の行人」が悟りを獲得するためには、前三釋の經文の義が自己の心中に備わっていることを觀察しなければならないと反駁を加えている。この論難者の主張は、先に引用した『觀心論』と近似する內容であり、智雲の認識していた禪宗の思想という可能性が高い。それに對して、智雲は天台の獨自性として、「觀心の釋經」を強調するのである。

第二の論點について、直ちに想起されるのは、湛然が所謂「法華超八」[19]を主張したことであり、『法華文句記』巻一中で、「今經於レ八爲レ屬レ何耶。若非二超八之如是一、安爲二此經之所聞一。」[20]と述べたことは周知の通りである。そういった見地からの解釋は、『妙經文句私志記』巻三に、「四敎之後、更須二五時一、方極二今經之意一。……前之四時有レ權有レ實。今經卽當二第五一向唯實一。」[21]と見出すことができる。ここで肝要なのは、湛然の『止觀大意』に、「若釋二法華一、彌須レ曉二了權實・本迹一、方可レ立レ行。此經獨得レ稱レ妙、方可三依レ此以立二觀意一。」[22]とあることから容易に推察されるように、敎判論はそのまま觀心の優劣と直結するという點である。智雲はこの問題についても、やはり『妙經文句私志記』巻三に、「觀心一釋、既權實・本迹、絕妙之後、必專二絕妙之觀一。餘經明レ觀隨レ敎、敎既

未レ融、観不レ得レ絶。縦別約レ圓説、義終須二是通一。故此約レ観文須二永別一。」[23]と主張している。すなわち、『法華經』の約教・本迹の二釋と、それに基づく觀心は、他經のそれと一線を畫すのである。

既述の如く、四種釋は教觀二門に特色があり、特に唐代においては、他宗批判の手段であったことが知られる。但し、これらの議論は、天台の優位を前提としたものであり、他宗との間で解決を見ることはない。以上の二點を踏まえた上で、次節では、四種釋について、「處中」の語を中心に論じることにする。

三　「處中」について

『法華文句』巻一上では、四種釋が使用される所以を、「處中」という用語で解説している。特に問題を孕むのは、次に示す『法華文句』巻一上の因縁釋である。

問。若略則一、若廣匪レ四。所以云何。
答。廣則令二智退一。略則意不レ周。我今處中[A]説、令三義易二明了一。因縁亦名二感應一。衆生無レ機、雖レ近不レ見。慈善根力、遠而自通、感應道交。故用二因縁釋一也。夫衆生求レ脱。此機衆矣。聖人起レ應。應亦衆矣。此義更廣。處中[B]在レ何。然大經[24]云、慈善根力、有二無量門一、略則神通[25]。

智雲撰『妙經文句私志記』の四種釋について（廣田）

質問は、なぜ四種釋は、「四」なのかである。それに對する解答に、「處中」が二つ使用されるが、同じ概念で使用されていない。詳論すれば、處中[A]は、「四」は多すぎず、少なすぎない數ということであり、何ら問題はない。處中[A]は、「廣」と「略」の偏りがないことを指す。ところが、「處中[B]在レ何。」というのは、因縁釋がなぜ處中なのかを質問している。すなわち、佛と衆生の感應道交の形は様々（廣）なので、それを扱う因縁釋が、どうして處中と言えるのか。處中[A]（廣と略の偏りがない）と矛盾するのではないかというのである。それに對する會通として、『涅槃經』巻一四の、「慈善根力、有二無量門一、略則神通。」を引證とする。すなわち、處中[B]は「略」であることが根據なのである。從って、二つの處中は、別概念と考えざるを得ない。智雲は、處中[B]について、『妙經文句私志記』巻二に次の如く註釋する。

雖二廣無邊一、總要不レ出二於應一。應對二於感一。應既如レ是、感亦如レ之。群生求レ脱、雖二復衆多一、更不レ出二於機感一。

故知、欣赴之事、事雖二無量無邊一、撮二其樞機一、要由二感應一。感應既卽因緣。則知二因緣是佛法之宗要一。此義最爲二要當一。則此名義處中明矣。[26]

すなわち、形は廣大無邊であっても、その樞機をとれば、すべて佛と衆生の感應道交であり、因緣である。從って、因緣釋を用いることは處中[B]である。そして、議論を總括する形で、『妙經文句私志記』巻二には、次のような見解を示している。

上來約二處中一、專釋下用二此四法一之所以上、而含二兩意一。初約二中當處中一[A]、釋下專用二四數一之所以上。次約二要當處中一[B]、釋下專用二此四法一之所以一。具如レ前竟。何故約二此處中釋一者、中當顯三數無二過・減一。要當明二顯レ名其巧一。會二此意一、總明下用二妙方法一、釋中於妙經上、能所皆妙。豈不二盡レ善盡レ美哉。[27]

智雲は、處中[A]を「中當」（中（なかほど）ニシテ當ル）とし、處中[B]を「要當」（要（かなめ）ニシテ當ル）と名づけている。「要當」とは、『妙經文句私志記』巻二で、「所ヨ以約二因緣一者、若無二因緣一、非二佛教義一。若無二約教一、不レ能レ顯二此經義一。若無二本迹一、不レ能盡二此經義一。若無二觀心一、不レ能レ顯二前妙用之義一。如レ是妙因妙果・自行化他・妙體妙用義盡二於此一。此四要當、更無二以過一。故須下特用二此四釋一、不レ用二其餘四一也。」[28]とあり、①因緣②約教③本迹④觀心の名で註釋するからこそ、『法華經』の義が明らかになるという意味である。つまり、四種釋は、「四」種類（中當）と、①因緣②約教③本迹④觀心（要當）の二義を兼ね備えているので、『法華經』の註釋に相應しい方法なのである。このような智雲の見解は、『法華文句記』巻一上の、「答中一文、具有二二意一。一者、總明二四義所以一。二、明二四中一一所以一。兩義咸得三以爲二處中一。一者、唯四不レ多不レ少。次因緣下、明二一一不レ失不レ差。故一雖二處中一、仍須レ至レ四。四攝レ義足。故不レ須レ過。假使過レ此、攝在二四義一。故四及一竝名二處中一。」[29]を承けた結果であろう。但し、湛然は「處中」を二義に區分するだけであり、智雲はそれを咀嚼して、概念を再規定しているのである。

右のような記述を確認した上で、考究しなければならないのは、四種釋に優劣が存在するか否かということである。というのは、日本天台では、「四重興廢」[30]のように觀心を重視する學說が生まれたからである。この點については、以下に引

く『法華文句記』巻一上の教説が参考となろう。

雖下則四意展轉相生、以二前前一爲レ廣、後後爲レ中、但存二當分一。皆名レ中故。故此四意從レ事名殊。應下以二後後一轉入中前前上。總而論レ之、不レ逾二感應一。但初名二感應一者、且捨レ通從レ別。以下無二下三一麁妙莫レ辯、是故四悉淺深未レ分。故得二聲教一方辯二感應權實不レ等、會コ歸圓極教之功一也。雖レ知三圓極竝在二今經一、猶覆二久成一而迷二其本一。若拂二迹應一、咸由レ本垂。開二迹中感應一、卽本地感應。本迹秖是一妙高廣。雖レ知二高廣一、機成由レ觀。觀成有レ感、眞感應也。故知、感應通コ貫下三一。況復一一展轉相攝。理雖二相攝一、事必甄分。[31]

引用を要約すれば、以下のようである。①因縁②約教③本迹④観心と次第するに従って、『法華經』の意が明確になるという意味で「(處) 中」である。それは四種釋が當分に機能するからであり、本質的にはそれぞれが「(處) 中」である。従って、④観心③本迹②約教①因縁へと遡ることもできる。總じて言えば、四種釋は佛と衆生の感應道交である。まず因縁釋は、四悉檀の観點から感應道交を扱うが、後の三釋がなければ、「麁妙」や「淺深」は分別されない。従って、佛が衆生に施した「聲教」を扱う約教釋が必要となる。そして、約教釋において、「感應の權實」を分別し、「圓極」が明らかになったとしても、「迹中」の段階にすぎないので、本迹釋が必要となる。次の本迹釋によって、「迹中の感應」が開會されると、「本地の感應」が明らかになり、本迹の感應は「一妙の高廣」であることが判明する。しかし、たとえそれを理解したとしても、衆生の機根が調い、観心をしなければ意味がない。最後に、観心釋が施されて、「眞の感應」となるのである。従って、因縁釋は、後の三釋を通貫していることが分かる。同様に、四種釋は相互に具足し合うのであるが、それぞれの役割には違いがある。[32]

すなわち、四種釋には次第があり、因縁釋を前提にして、後の三釋は成立すると同時に、どれ一つ欠けても感應道交は完結しない。従って、湛然の教學において、四種釋は當分に役割の違いはあるが、優劣は存在しないのである。この問題に關して、智雲の見解を確認するならば、まず因縁釋について『妙經文句私志記』巻二には、「如レ是一切、既竝不レ出二於四一。則是一切衆生、有二此四宗機感一爲レ因、佛以二四宗應發一爲レ縁。因縁和合、說二此妙教一、獲二四妙益一、則感應利益之道

盡二於此一矣。後之三釋、只成二此義一。一家釋義、專在二於此一。故是一切事興之本。稱爲レ宗者良有レ以矣。[33]」とある。すなわち、衆生に備わる四悉檀に對應する機感が因であり、佛の應發が緣である。因緣が和合し、衆生が『法華經』における四悉檀の利益を被れば、感應道交の利益はここに極まる。そして、後の三釋はただ感應道交を完成させるだけであるとしている。次に、四種釋の次第について、『妙經文句私志記』巻二では、「因緣名レ總、餘釋名レ別。此中固爾。故此四釋自有二次第一。不レ可二雜亂一。若於二因緣一便明二權實之義一、是卽繁二亂其序一。[34]」や、「前明二因緣一、當分雖下爲二處中一然上、則通而未レ別、殊未レ顯二於此經之意一。若非二約教一、無三以能顯二此義一。[35]」と主張している。つまり、智雲は湛然の教學を踏襲し、四種釋のそれぞれに等しい價値を認めているのである。

ここまで見てくると、智雲は湛然の教學を繼承する立場であることが判明する。一方で、兩者の相違はどこにあるのかという疑問が生じる。しかし、湛然の教說そのものが難解であり、その線引きは一筋縄ではいかないのも事實である。そこで次節では、智雲の觀心釋に關する教說を中心に考察し、唐代における四種釋の一端を解明したい。

四　智雲の四種釋について

智雲の四種釋を理解する上で、次に引く『法華文句』巻一上の觀心釋が重要である。

> 觀心釋者、觀二前悉檀・教・迹等、諸如是義一、悉是因緣生法、卽通觀也。因緣卽空卽假者、別觀也。二觀爲二方便道一、得レ入二中道第一義一、雙照二二諦一者、亦通亦別觀也。上來悉是中道者、非通非別觀也。[36]

これは序品第一の「如是」に對する註釋であり、Ⅰ通觀Ⅱ別觀Ⅲ亦通亦別觀Ⅳ非通非別が提示される。智雲は、順番に①因緣②約教③本迹④觀心を配當して解說を加え、どのような過程を經て、行者が悟りの境地を獲得するかを說明している。

まず、Ⅰ通觀について、『妙經文句私志記』巻三では、「此心卽是因緣生法故也。如レ前雖二竝極妙一、若於二自心一、悉猶緣生、竝全麁法。未下曾以二妙方一融上之故也。……言二通觀一者、直總了二知悉是緣生之法一、未レ論二空假之別一。[37]」と記される。すなわち、①因緣②約教③本迹で明らかになった「極妙」が、

「因縁生法」としての心にあることを認識する。但し、まだ「空假」を分別していない段階であり、①因縁と對應する。

そして、Ⅱ別觀について、『妙經文句私志記』巻三では、「今了二縁生卽空卽假一、便成二微妙二諦之別一。豈非二約教觀一耶。」[38]とあり、因縁生法を「二諦」の觀點から了知するという。そして、この段階を②約教に配當する。

續いて、Ⅲ亦通亦別觀について、『妙經文句私志記』巻三では、「雖二復縁生卽中一、言說次第、必在二空假之後一。又、明二本迹一必在二開權顯實之後一。欲二寄レ中以明レ之。」[39]とあり、「空假」に次いで「中」があるのは、②約教に次いで③本迹が施されるのと同様であるとする。

最後に、Ⅳ非通非別について、『妙經文句私志記』巻三では、次のように解說されている。

今卽窮レ理盡レ性而觀。故是絶妙之觀。以二此觀一則一心便爲二三諦之妙法一也。前明二因縁如是之義一、雖二則本是此經如是之義一、若不レ得二次約教・本迹之解一、妙義終不レ能レ顯。此中觀心亦爾。心中如是之法、雖二則本妙一、若不レ得二此三觀觀レ之、此心妙義、終不レ能レ成。如三水(氷カ)不レ融終無二水用一。故知、三觀乃融レ心爲レ妙之神方矣。豈得二不レ志而勤レ之乎。既必待レ觀方妙。又、要託二外事一、方顯二內心一。豈得レ不レ約二四種之釋一。[40]

この段階で「絶妙之觀」がなされて、「三諦之妙法」[41]が獲得される。それは教門で、①因縁②約教③本迹と次第しなければ、「妙義」が明らかとならなかったのと同様である。觀門においても、Ⅰ通觀で心が境であることを認識して後、Ⅱ別觀（二諦）Ⅲ亦通亦別觀（三諦）Ⅳ非通非別（三諦の妙法）と次第しなければ、悟りは獲得できないとする。智雲がこのような解釋をするのは、「要託二外事一、方顯二內心一。」とあるように、教觀二門を重視するからであり、更に言えば、初心の行人が念頭にあるからに他ならない。[42]

尙、ここで取り上げた「如是」釋は、『妙經文句私志記』巻三には、「然約レ觀釋、或廣或略。廣則具明二四觀一、如二前如是中說一。略則直約レ觀解。」[43]とあり、觀心の廣釋とされる。從って、觀心釋の中に四種釋を當てはめる解釋は、その他には見られない。

補足として、湛然の註釋について一言するならば、『法華文句記』巻一中では、「又、爲レ成二四句一故、借二別教一離爲二兩句一。故第四句卽是今經之妙觀也。」[44]とあり、智雲の解釋とは相

違がある。しかしながら、湛然の教説は十分に理解し難い部分があり、ここでは、觀心釋に四種釋を配置し、それを廣釋とする解釋は、湛然には見られないと指摘するに留める。

五　結び

本稿では、智雲撰『妙經文句私志記』の教學を扱い、四種釋について検討を加えた。初めに、四種釋は教觀二門で構成され、それは他宗批判の手段であったことを論じた。まず、觀心偏重という觀點から、禪宗が批判される。特に、智雲には、北宗禪の『觀心論』に近い思想への批判が確認できた。また、教判論はそのまま觀心の優劣に直結する。智雲は、湛然の「法華超八」の教學を繼承し、『法華經』の約教・本迹の二釋と、それに基づく觀心を重視することが判明した。

續いて、「處中」の語に検討を加えた。「處中」とは、四種釋が使用される理由を説明するための用語である。智雲は、湛然が二義に區分したのを承けて、さらに「中當」と「要當」へ概念を再規定した。「中當」とは、「四」が數として適切という意味であり、「要當」とは、①因緣②約教③本迹④觀心の名で註釋するからこそ、『法華經』の義が明らかになるという意味である。そして、湛然の教説から、四種釋には次第があること、またそれぞれに役割の違いはあるが、優劣は存在しないことを論じた。

最後に、智雲の觀心釋について、検討を加えた。智雲は、初心の行人が悟りを獲得するには、教觀二門が必要であるとの認識から、Ⅰ通觀（因緣）、Ⅱ別觀（約教）、Ⅲ亦通亦別觀（本迹）、Ⅳ非通非別觀（觀心）といった具合に、觀心釋の中に四種釋を配置する。その意圖する所は、教門において、悟りの境地が①因緣②約教③本迹の次第で明らかにされたのを踏まえて、觀門において、行者が悟りを獲得する過程に擬することにある。智雲はそれを觀心の廣釋とする。

從來、智雲は湛然門下とされながらも、その評價には曖昧さが殘った。本稿では、特に教學の側面から検討を加え、その結果、智雲は湛然の教學を比較的忠實に繼承する立場であることを指摘した。その他の湛然門下についても、註釋形式だけではなく、教學に踏み込むことで、湛然との關係を見定めていく必要があろう。

註

（1）唐代天台教學の梗概については、島地大等『天台教學史』（明治書院、一九二九年、一二二頁～一四九頁）、安藤俊雄『天

台學　根本思想とその展開』（平樂寺書店、一九六八年、二九九頁～三二八頁）參照。また、湛然の諸宗批判については、安藤俊雄『天台性具思想論』（法藏館、一九四八年、一二六頁～一三八頁）參照。

（2）湛然門下を總合的に扱う先行研究として、中里貞隆「荆溪湛然の門下と其著書」（『山家學報』新九、一九三四年）、大久保良順「六祖門下の文句研究と圓鏡について」（『叡山學報』二四、一九六五年）、荒槇純隆「唐中期における天台教勢―湛然の法統をめぐって―」（『大正大學大學院研究論集』一一、一九八七年）參照。智雲については、多田孝文「唐代における法華文句研究の一側面」（『天台學報』一四、一九七一年）等の論文がある。

（3）大正七四・二九八頁中下。

（4）註（2）。中里氏が指摘するように、湛然に異を唱えることは、智度の『天台法華疏義讃』にも確認できるので、當時の學風と考えてよいであろう。時代は少し下るが、圓珍の『觀普賢菩薩行法經記』（大正五六・二四七頁上）に、「座主答曰、此土風俗、護二他學意一、傳二我宗教一。如今在レ座把レ疏聽徒、多此他宗成二名德一者。爲二人情一故、屈レ老關レ座。若留二心意一、決擇嫌斥、長二他瞋恚一、損二我宗門一。所以略過、不レ用二快消一。但同宗人、於レ坊盡レ意、商コ量疏義一、成二己懷抱一云云。」とあり、他宗との論爭よりも、自宗の内部で議論を深化させる傾向を傳える。この箇所については、小野勝年『入唐求法行歴の研究　智證大師圓珍篇　上』（法藏館、一九八二年、一八二頁）參照。

（5）『法華文句』の内容については、『國譯一切經和漢撰述部・經疏部二』（大同出版社、一九八〇年改訂）淺井圓道氏の解題、參照。四種釋については、『望月佛教大辭典』第二卷「四釋」の項、參照。

（6）續藏一―四五・三五六丁左下～三五七丁右上。

（7）大正四六・九七頁下。

（8）大正四六・九八頁上。「非レ數二他寶一」とは、六〇『華嚴經』卷五「四諦品」第四（大正九・四二九頁上）の、「譬如下貧窮人日夜數二他寶一自無中半錢分上。多聞亦如レ是。」に基づく。

（9）大正四六・三八二頁上。

（10）大正三四・一五四頁下。

（11）池田魯參「湛然教學における頓漸の觀念―澄觀教學との對論―」（『南都佛教』四七、一九八一年）、同「天台止觀と禪―湛然教學の禪宗批判―」（『佛教思想史』、一九八一年）參照。

（12）大正四六・九八頁上。

（13）大正四六・三八二頁上中。該當箇所については、長倉信祐「湛然の禪宗批判の一斷面―『摩訶止觀輔行傳弘決』を中心に―」（『天台學報』四六、二〇〇三年）に指摘がある。

（14）伊吹敦『禪の歴史』（法藏館、二〇〇一年、三五頁）參照。

（15）田中良昭『敦煌禪宗文獻の研究　第二』（大東出版社、二〇〇九年、一〇四頁）。また、『觀心論』（一一三頁）に、「又問。

智雲撰『妙經文句私志記』の四種釋について（廣田）

經中所レ說、佛令下衆生修コ造伽藍、鑄寫形像一、燒香・散花、燒二長明燈一、晝夜六時、遶レ塔行道、持齋・禮拜、種種功德皆成中佛道上。若唯觀心惣攝二諸行一、說二如是事一應二虛妄一也。答曰、佛所レ說有二無量方便一。以二一切衆生鈍根狹劣一、不レ悟二甚深一。所以假二有爲法一喩二無爲一。若不レ修二內行一唯只外求、希コ望獲レ福無レ有二是處一。」とある。この箇所は、飛錫（生沒年不詳）の『念佛三昧寶王論』によって批判されている。詳細は、伊吹敦「『念佛三昧寶王論』に見る禪の動向」（『東洋學研究』四一、二〇〇四年）參照。

(16) 禪宗の勢力擴大について、湛然と交友のあった梁肅は『天台法門議』（『全唐文』卷五一七）で、「從二其門一者、若下飛峨之赴二明燈一、破塊之落中空谷上」と表現している。

(17) 『妙經文句私志記』卷二。續藏一―四五・三五五丁左下～三五六丁右上。觀心釋について、「……初心行人雖二復談レ彼、未レ有レ利コ益於己一。然則聖人垂レ教、正令二一切因以了知一。自己心內、自有二如レ是道理一、推求・欣勇・進修尅レ證。若不二約レ此以釋一、卽於二行人一都無二利益一。」とある。

(18) 續藏一―四五・三六六丁左上下。

(19) 「法華超八」については、安藤俊雄『天台學　根本思想とその展開』（平樂寺書店、一九六八年、三〇二頁～三〇七頁）參照。

(20) 大正三四・一五九頁下。本迹釋は『法華文句』卷一下で、「若釋二他經一、但用二三意一。爲レ未二發レ本顯レ迹故。當レ知、今經三釋與レ他同。一釋與レ彼異。」とあり、『法華經』の註釋にだけ使用される。因みに、湛然は『法華文句記』卷一中で、「所レ言他者、卽他部也。於二前四味一唯除二鹿苑顯露無レ圓。所レ言同者、但云三今圓同二彼圓一。故應レ云二兼帶復成レ異也。又言レ異者、彼無二久本一。諸經亦有二體用等本迹一、名同體異。從二體異邊一故云レ異也。」として、約部奪釋の立場から、他經との違いを強調している。

(21) 續藏一―四五・三九二丁左下。

(22) 大正四六・四五九頁中。

(23) 續藏一―四五・三八二丁右下。

(24) 『涅槃經』卷一四（南本）「梵行品」第二〇。大正十二・六九九頁中。「善男子。我說是慈有二無量門一。所謂神通。」とあるのに基づく。

(25) 大正三四・二頁上中。

(26) 續藏一―四五・三五四丁左上。

(27) 續藏一―四五・三五七丁左上。

(28) 續藏一―四五・三五三丁左上下。

(29) 大正三四・一五四頁中下。

(30) 島地大等『天台教學史』（明治書院、一九二九年、五〇一頁～五〇四頁）參照。

(31) 大正三四・一五五頁下。湛然の『法華玄義釋籤』卷四（大正三三・八四六頁中）には、「教與二本迹及以觀心一、展轉相絕。何者、不（ママ）レ由二迹中圓融之說一故、不レ能レ知二本地長遠之本一。若

本遠教興故使二迹絶一。本雖レ絶レ迹、豈卽說レ遠、能知二心性一。若語二心性一、迹本俱絶。故云二本迹雖レ殊不思議一。一二彼殊一故。故知、徒引二遠近一、未レ了二觀心一、遠近自レ彼、於レ我何爲。如二貧數レ寶此之謂也。」とある。要約すれば、以下のとおり。本地の大教が興れば、迹中の大教は絶する。その時の「心性」は「迹本俱絶」であり、それは「本迹雖レ殊不思議一」と表現される。但し、觀心を行わなければ、その境地は他人の寶を數えても、自らに得るものはないようなものである。このような湛然の記述が一因となり、日本天台では「四重興廢」などの觀心を重視する教義の形成へと發展する。

(32) 四種釋が相互に具足し合うという考え方は、『妙經文句私志記』巻二（續藏一―四五・三五七丁右下～左上）に、「隨擧二其一一、皆卽具レ四。故知、此經一部始終、莫レ非二因緣一、莫レ非二皆妙一、莫レ非二久遠本迹一、莫レ非二卽心一。四只是一、一而能四。自在無方、斯妙致者矣。」とある。

(33) 續藏一―四五・三七三丁右下。

(34) 續藏一―四五・三七二丁左上。

(35) 續藏一―四五・三五五丁右上。

(36) 大正三四・三頁下。

(37) 續藏一―四五・三八〇丁左下。

(38) 續藏一―四五・三八一丁右上。

(39) 續藏一―四五・三八一丁右上。

(40) 續藏一―四五・三八一丁右下。『妙經文句私志記』巻三（續藏一―四五・三八一丁右下）には、「前約教・本迹、皆含二待・絶兩意一。向明レ二正爲レ對二上相待之意一。故且言二空假之別一、及待レ二明レ中、待レ中明レ邊。」とあり、Ⅱ別觀（約教）とⅢ亦通亦別觀（本迹）の分別は、あくまで相待の立場としている。

(41) 「三諦之妙法」は、『法華文句』巻一上（大正三四・五頁上）の、「觀心卽空卽假卽中、是圓覺也。」に對して、『妙經文句私志記』巻三（續藏一―四五・三九三丁左下）に、「以二解心深利一、如レ理頓照。故能皆卽。以レ此故成二圓覺一。圓故妙也。正由レ此故、有二前圓教覺義一。若修二如レ是圓妙觀一時、無二復偏麁之觀一。卽絶待觀。」とあるので、「卽空卽假卽中」のことである。

(42) 註（18）。

(43) 續藏一―四五・三九四丁左下。

(44) 大正三四・一六〇頁下。

〈キーワード〉智雲、四種釋、教觀二門、處中、『觀心論』